幼年教育研究年報　第24巻
The Annual Research on Early Childhood, 2002, **24**,111-117

資　料

幼児期及び児童期の攻撃行動と仲間関係に関する研究動向

畠山　美穂[1]・畠山　寛[2]・山崎　晃[3]

Aggressive Behavior and Peer Relationships in Young Children and Childhood

Miho Hatakeyama[1], Hiroshi Hatakeyama[2] and Akira Yamazaki[3]

The amount of literature focusing on the issues of aggression in young children has increased greatly in past years. Yet to date, little attention has been paid to the developmental implications, including the short- and long-term consequences of peer aggression and victimaization. Overseas, extensive research employing sociometric testing has been conducted over the last twenty years. In this article, studies on problems in peer relations are reviewed with the aim of understunding the behavioral characteristics in children who are rejected by their peers. First, studies addressing peer relation and aggressive behavior are reviewed. Second, research on forms of aggression are reviewed. Third, relation between forms of aggression and gender differences are reviewed. Fourth, relation between aggression and peer groups was reviewed. Finally, suggestions are offered for future research to prevent peer victimization and peer rejection.

Key Words:aggression, peer relation, peer victimization, sociometric status

はじめに

ここ数年，青少年の暴力やいじめの問題に対する議論の高まりとともに，わが国においても，子どもの攻撃行動に関する研究の数は，徐々に増加している。

攻撃行動についての研究は，心理学だけでなく様々な分野において研究されてきた。心理学の分野において攻撃行動は，1930年代後半に注目され始め，現在まで盛んに研究されている。中でも欧米では，過去20年以上，攻撃行動と仲間関係の問題について実証的な研究が数多く行われてきた。

日本においても，子どもの「いじめ」や「暴力」が社会的な問題として取り上げられるようになった昨今，攻撃行動と仲間関係についての事例研究や調査研究が徐々に増加している。しかし，日本における攻撃行動の研究は，攻撃行動のメカニズムを解明し，効果的な介入・予防法の確立を目指すには，質・量ともにまだ十分であるとは言えない。米国では，いじめの問題がクローズアップされた1970年代後半から，仲間関係と攻撃行動についての研究が開始され，それ以降攻撃行動の原因やその影響に関する基礎的な研究が，主に発達心理学の分野において行われてきた。1980年代からこれまでの約20年間，攻撃行動は，用いられた文脈や方法の違いにより，いくつかのタイプに分類され，そのタイプと仲間評価との関連が検討されてきた。また，攻撃的な子どもの社会的スキルの欠如とその介入研究が盛んに行われるようになってきた。

攻撃行動と仲間関係との関連を検討した研究は，幼児期から児童期の子ども（特に男児）を対象としている。これらの研究は，攻撃行動を予測したり測定するための主要な情報源として，仲間や教師による様々なアセスメント情報，子ども自身の自己報告や面接調査，子ども同士の仲間相互作用を直接観察する行動観察情報などを利用している。言語的報告の限界から，対象が幼児期の場合，行動観察が用いられる場合が多い。

本論文では，これまでの攻撃行動に関する研究動向

1 広島大学教育学研究科博士課程後期
2 広島大学教育学研究科
3 広島大学教育学部附属幼年教育研究施設教授

を概観し，今後，わが国で攻撃行動に関する研究を展開するにあたり，留意すべき点を明らかにすることを目的とする。

1．攻撃行動と仲間関係：ソシオメトリックテストによる仲間内地位と行動特徴

始めに，ソシオメトリックテストにより測定された子どもの仲間内地位と関連する行動的要因や行動的先行条件について包括的に展望する。攻撃的な子どもは，引っ込み思案的な子どもなどと同様に，これまで，「仲間関係に問題を持つ子ども」などと呼ばれ，検討の対象とされてきた。仲間関係に問題があるとされる子どもに関する研究は，1970年代以降，ソシオメトリックテストにより測定された仲間内地位や仲間内評価と行動特徴との相関を求める方法を中心に進められてきた。地位と関連する行動要因は，微妙な発達差は認められているものの，全ての年齢にわたってかなり一貫している。

Wasik(1987)は，幼稚園児を対象に，７つの仲間査定項目とソシオメトリック得点との相関を検討したところ，「けんかをしかける」や「妨害的である」という項目では，仲間からの肯定的な評価(社会的好み得点，ソシオメトリック評定得点)と負の相関を示し，「協力的である」という項目では正の相関を示した。小学生を対象とした研究でも，攻撃行動などの反社会的な行動が仲間からの拒否と関連し，向社会的な行動が仲間からの受容と関連することを示している。Coie, Dodge & Coppotelli(1982)は，仲間による肯定的指名得点と否定的指名得点を使用して，５つの異なる仲間内地位群を区別している。それらの５群は，人気のある子群(人気児群)，拒否される子群(拒否児)，無視されることが多い子群(無視児)，敵味方の多い子群，平均的な子群(平均児)であった。３年生，５年生，８年生を対象に，仲間査定調査を実施した結果，拒否児群は，「協力行動」と「リーダーシップ行動」では仲間から低く査定され，「けんかをしかける」「妨害的である」「他に援助を求める」では，高く査定された。

また，Coie et al.(1982)の研究は，別の研究データを提供してくれる。彼らの研究の結果，８年生では，仲間による拒否や「けんかをする」「妨害的である」のような行動は，「仲間集団に入れてもらえない」ことと正の相関があり，これらの行動と仲間内地位との相関値は，３，５，８と学年が進むにつれて徐々に低下していった。この結果は，攻撃の頻度が年齢とともに減少している結果と解釈された。また，Olweus(1977)は，６年生を対象に縦断的に攻撃のタイプと仲間内地位との関連を検討した。その結果，７年生の時点でソシオメトリック地位と「仲間に対してけんかをしかける」の間には有意な相関が無いことが示された。この結果を受けて，Olweusは攻撃行動は仲間の人気度とは関連しないと結論づけた。しかし，これら２つの先行研究には以下に示す問題がある。それは，攻撃行動を「けんかをする」や「妨害的である」といった身体的・直接的に相手を傷つける攻撃だけを攻撃と定義していることである。しかし，攻撃行動は身体的な攻撃のように，相手を直接的に傷つけるものだけではない。仲間を無視したり，告げ口するなどの間接的な攻撃も存在する。つまり，直接的な攻撃は，年齢とともに減少し，攻撃行動と仲間の人気度との間に関連は見られなくなることが示唆されるが，間接的な攻撃が仲間関係とどのように関連するのかについて実証した研究は見られない。

以上のことから，攻撃は仲間による拒否と関連する主要な要因であるが，どのような攻撃でも仲間内地位に等しく有害な意味を持つものではないかもしれない。

そして，攻撃行動の表出方法やそれに対する周囲の評価も年齢とともに変化すると考えられる。そのため，次に攻撃行動の表出方法の違いについて論じることとする。

2．攻撃行動のタイプと仲間関係

一口に攻撃行動といっても用いられる目的や表出方法は様々であり，それらの違いによって仲間からの評価が異なることから，攻撃行動はこれまでいくつかのタイプに分類されてきた(Crick & Grotpeter, 1995)。

Lesser(1959)は，５，６年生を対象に，攻撃のタイプと仲間内地位との関連について調べた。攻撃のタイプは，攻撃行動が用いられるまでの文脈やその方法の違いから，５つのタイプ(正当な身体的攻撃、突発的攻撃、不当な身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃)に分類された。その結果，不当な攻撃をしかける子どもは仲間から拒否されるが，正当防衛の為に攻撃する子どもは好かれることを報告した。また，Newcomb, Bukowski, Pattee(1993)は，1990年代初頭までに発表されたソシオメトリックによる評定と子どもの行動に関する研究をメタ分析した。その結果，攻撃行動のタイプにより仲間からの受容に違いが見られた。攻撃行動の中でも仲間に受容されないのは，相手の行動に対する過剰反応や衝動性，崩壊性など，多動性を伴う攻撃行動と，妨害や無視，ルール違反，告げ口，かんしゃく，敵対反応などの，間接的，言語的攻撃行動などであるとされた。一方，けんかをしかけるなどの身体的攻撃は，仲間に受容されやすいということが明らかにされ

ている。

攻撃行動が行われるまでの文脈の違いにより，攻撃行動のタイプを分類したDodge & Coie(1987)は，仲間拒否に関連する攻撃行動のタイプを，積極的(proactive)攻撃と，報復的(reactive)攻撃の２つに分類した。報復的攻撃とは，相手に脅されたと感じた場合や，明らかに怒りを伴った時に行なう攻撃反応であり，frustration-aggressionモデル(Berkowitz, 1963)に基づき定義された。この攻撃は，他の研究者により"敵意的(hostile)"攻撃とも呼ばれている(Hartup, 1974)。一方，積極的攻撃とは，他者からの挑発が無いのに他者に強制したり影響を及ぼしたりする目的で行われる攻撃であり，報復的攻撃よりも目標達成的であるとされる。積極的攻撃には，さらに２つのサブタイプ（道具的・脅し）が存在し，道具的攻撃は，物や場所を獲得するために使用される攻撃であり，脅し攻撃は仲間を脅迫したり支配したりする攻撃であると分類されている(Price & Dodge, 1989)。Price & Dodge(1989)は，幼児と1年生の子どもを対象に，道具的攻撃と脅し攻撃の仲間評価について検討した。その結果，幼児において，脅し攻撃が仲間の肯定的評価と正の相関を持ち，児童では負の相関を持つことが示された。また，Mcneilly-Choque, Hart, Robinson, Nelson, & Olsen(1996)は，５歳児を対象に，道具的攻撃は仲間の肯定的評価が低いことを報告した。これらの結果は，幼児期には，脅し攻撃を行う子どもは仲間から受容されるが，道具的攻撃は仲間から受容されず，児童期に入ると脅し攻撃を行う子どもは仲間から受容されないことを示している。

このことから，年少児では相手を支配したり脅したりする攻撃行動は，仲間内の優劣順位の中での自分の位置の確立と関連しており，仲間受容と関連する。一方，単純に道具的に攻撃が用いられる場合は，受容されにくいと考えられる。

攻撃行動を用いられる方法により分類した研究(Crick & Grotpeter, 1995)によると，相手を直接的に，叩く，蹴る，言語的に脅かす等，あからさまな方法で相手を傷つける攻撃は直接的(overt)攻撃と呼んだ。それに対して，「自分の遊びグループから仲間を排斥する」，「仲間がその子どもを嫌うように噂を流す」(Crick & Gotpeter, 1995)といった行動で仲間関係にダメージを与える，または仲間関係を絶つことで相手を傷つける攻撃は関係性(relational)攻撃と定義され(Crick & Grotpeter, 1995)，"間接的攻撃"と呼ばれることもある。

関係性攻撃を行う児童は一般に，仲間内地位が低いことが知られている(Crick & Grotpeter, 1995)。しかし，森野(2000)によると，対象児が幼児の場合，地位の高い子どもが行うことが示されている。このことから，幼児期において関係性攻撃は仲間内の優劣順位の中での位置決定と関連している言えよう。

以上の結果から，幼児期には脅し攻撃や関係性攻撃を行う子どもは仲間から受容されるが，児童期に入ると，脅し攻撃や関係性攻撃を行う子どもが仲間に受容されないことが示された。しかし，なぜ，このような結果になるかについてはこれまでのところ明らかにされていない。

そのため，今後，攻撃行動のタイプと仲間受容の発達的な変化について詳しく検討する必要があろう。

３．攻撃のタイプと性差

子どもの攻撃行動に関する初期の研究では，男児は女児よりも攻撃性が高いと捉え(Parke & Slaby, 1983)，主に男児を対象としてきた(Dodge & Coie, 1987 ;Lesser, 1959)。それは，男児が行う攻撃は，相手をたたく，蹴るなどのように，一見して攻撃であることがわかりやすく，従来の研究ではこうした目につきやすい攻撃行動のみを扱っていたことが原因であると考えられる。しかし，1980年代後半に入り，女児の攻撃行動に関しても関心が向けられ，男児が女児よりも攻撃的であるのではなく，攻撃の表出方法が異なるということがわかってきた。Crick & Grotpeteter(1995)は，たたく，蹴るなどの直接的攻撃は男児に，仲間関係を絶つために仲間を無視するなどの関係性攻撃は女児に特徴的であると報告した。また，イギリスでも，身体的攻撃は男児に，言語的攻撃は女児に多い攻撃行動であることが示された。攻撃行動の表出に関するこうした傾向は，わが国においても確認されている。このような攻撃行動の性差がなぜ生じるのであろうか？

中・高校の女子生徒は，男子よりも仲間との「関係確認」や「秘密共有」を行うことが多く，仲間つき合いの中で関係性を重視する。また，女子は少人数の仲間グループを形成し，親密な友人と他の友人とのづき合いを区別すると言われている。こうした仲間とのつき合いの性差が，攻撃行動の性差と何らかの関連があるのではないだろうか。

仲間から拒否される女児は，抑うつ傾向が高くなることが示されているが，男児にはそうした問題は見られないことがわかっている(Kupersmidt & Patterson, 1991)。つまり，女児にとって仲間関係を閉ざされることで，深刻な精神的苦痛を受けると考えられる。このことから，女子の間では，仲間との関係性を崩壊させることこそが，相手に最もダメージを与える方法であると考えられる。そのため，女児が相手に対して

ダメージを与えようとする時,関係性攻撃を用いて相手を攻撃するのではないか考えられる。

また,関係性攻撃は児童期以上の子どもの問題ではない。森野(2000)は,幼稚園児にも同様の傾向があることを報告している。しかし,なぜこうした性差が,生じるのかについての実証的な検討はされておらず,今後,より詳細に検討する必要があろう。

4．攻撃行動と仲間グループ

これまで,攻撃行動はどの年齢においても一貫して仲間に受け入れられないと述べてきた。しかし,攻撃行動が正当防衛のために行われた場合は許容されたり,むしろ立派な行動として受容されることがあることが示されている。また,攻撃行動はその表出方法の違いだけでなく,仲間グループの違いによっても受容の程度が異なることがわかっている。攻撃行動と子どもの仲間グループとの関連を検討した研究によると,攻撃的な子どもは仲間全てに拒否されるわけではないことが示されている(Cairns, Cairns, Neckerman, Gest, & Gariepy,1988;Farver, 1996)。Farver(1996)は,４歳児を対象として,攻撃行動の頻度と仲間グループおよび,グループ内地位との関連を検討した。その結果,同一のグループに属する子どもは攻撃の頻度が同程度であることがわかった。つまり,攻撃的な子どもは,攻撃的な子ども同士グループを形成したり,仲のよい友だち関係を作ることが示されている。このことから,攻撃的な相互作用が当たり前の規範であるような,普通とは異なる集団環境の中では,攻撃行動は拒否の対象とならないのである(Wright,Giammarino,& Parad,1986)。

規範とは,心理学における一般的な概念で,社会生活を営む人が互いに共有している規則や基準とされる。攻撃行動は,相手に対して何らかの危害を加えようとする意図的な行為(Berkowitz,1963;大淵,1993)であることから,反社会的行動である。しかし,前述したように,正当防衛的な攻撃行動が許容される場合がある(Lesser,1959)のは,報復の規範が働いているからだと考えられる(Gouldner,1960)。青年期を対象とした研究で,敵対的行為を最初に行う者は,不当で違法な行動であると周囲に見られていたが,相手の挑発に対する反応として相手を攻撃したものは,防衛的で正当に行動したと判断された。このように,攻撃に対する報復的攻撃,あるいは,不当や不正に対する攻撃行動は,制裁としての意味を持つと考えられる。攻撃行動に対する制裁の機能には,加害者に対する行動矯正という側面と,不正に相応する苦しみを受けるべきだと考える感情的側面の２つの側面がある。さらに,制裁行為には,公正の回復といった意味での社会規範の維持を目的とする公的制裁と,それを含まない個人的制裁がある。報復攻撃はこの個人的制裁にあたる。攻撃行動も,こうした個人的制裁である場合に,人は寛容であると考えられる。子ども向けの絵本やテレビにおいても,悪者が主人公に社会的な制裁を受ける場面が存在し,子どもは主人公の制裁に対して拍手を送る。実際,報復的な攻撃であれば,仲間に許容されるという結果もある。つまり,返報性の規範に則った攻撃行動がもつ意味(ここでは「制裁」)の背景にある公正さという概念が理解されているものと考えられる。しかし,いつ頃から攻撃行動の公正さを理解できるようになるのかは明らかにされていない。そのため,今後,攻撃行動の概念的理解を公正さや返報性の規範という側面について,発達的な検討が必要となるだろう。

また,先に攻撃的な相互作用が当たり前の規範であるような,普通とは異なる集団環境の中では,攻撃行動は拒否の対象とならない(Wright,Giammarino,& Parad,1986)と述べた。これには,Harre & Secord (1973)の研究が参考になる。この研究では,フーリガンの一見暴挙として見える行為も,ある種の規範に従った行為であることを明らかにした。つまり,彼らは,自分の仲間は傷つけないという規範をもっているのである。また,このような特殊な状況では,「攻撃はよくない」という一般的な規範がなくなったというより,むしろ,「攻撃すべき」という新しい規範が出現し,共有されたと考えられる(Turner & Killian,1972)。つまり,ギャング期の男児が集団を形成し,周囲に対して暴力的行為を行うのは,「仲間以外の者は,攻撃してもかまわない」といった規範が出現しているためと考えられる。しかし,これまでのところ,子どもを対象とした研究においては,攻撃的な子ども同士が仲間関係を形成するということまでは報告されているが,その攻撃は,仲間内で用いられているのか,仲間外に用いられているのかについては明確にされていない。今後は,攻撃的な子どものグループについても詳細に検討する必要があろう。

5．仲間からの攻撃による犠牲

これまで述べてきたように,子どもの攻撃行動に関する研究は,攻撃的な子ども(攻撃加害者)に焦点を当て研究が行われてきた。一方,仲間から攻撃される子どもについての研究は非常に乏しいのが現状である。そのため,現時点でどのような子どもが仲間から攻撃されやすいのか,また,持続的に攻撃されることで生じる様々な問題については,明らかにされていない。

Olweus(1978)は,13歳から16歳までの男児を対象と

して，学校でのいじめっ子やいじめられっ子，暴力的な子どもの特徴について検討した。その結果，いじめられっ子は，不安傾向が強く，自尊心が低いこと，そして，仲間から受容されておらず，自己主張や自己防衛および，攻撃行動を恐れるという特徴があることが明らかにされた。この研究は，おそらく，攻撃による犠牲者について体系的に検討した最初の研究である。しかし，この研究において，対象児が仲間から拒否を受けているかについては測定されていない。従って，仲間からいじめの犠牲となっている子どもが，拒否されているかどうかについては断定できない。だが，Perry, Kusel, & Perry(1988) では，いじめの犠牲となる子どものほとんどが仲間から拒否されていることを報告した。

その後，1990年代に入って，徐々に攻撃による犠牲について関心が寄せられ，いくつかの研究が行われてきた。例えば，仲間からの攻撃の犠牲となった子どもは，仲間から拒否されたり，学校適応に問題を抱えることが多く，抑鬱，不安，孤独感といった内的な問題も持ちやすいこと (Boulton & Smith, 1994; Boulton & Underwood, 1992)，また，仲間の攻撃の犠牲となることは，将来の適応問題をも予測することが示された (Olweus, 1993)。1990年代後半には，攻撃のタイプと犠牲との関係について検討され，直接的攻撃による犠牲者は女児よりも男児が多く，関係性攻撃による犠牲者は，男児よりも女児に多く見られることが示された (Crick & Grotpeter, 1996)。また，直接的攻撃及び関係性攻撃の犠牲となる子どもは，犠牲を受けていない子どもと比べ，社会的-心理的不適応が見られ(例えば，抑鬱，孤立，社会的不安，拒否：Crick & Grotpeter, 1996)，現在だけでなく将来の不適応をも予測することが示された。

この結果は，子どもの社会的適応問題や仲間関係の改善を目指した介入指導プログラムの開発により用いられ，一定の実践的成果を挙げている (佐藤・佐藤・高山, 1993)。

6．仲間からの拒否とそのリスク

現在，子どもの仲間関係についての多くの研究で，仲間からの拒否，攻撃，引っ込み思案などの諸要因が，子どもの現在，および将来の不適応(非行，犯罪，精神衛生)などのリクスを関連することが示されている(Parker & Asher, 1987)。そこで，最後に，仲間から拒否される子どものリスクについて述べる。

攻撃的な子どもが仲間から拒否されやすいということは，これまで繰り返し述べてきた。しかし，いったいどのくらいの割合で拒否されている子どもに攻撃行動が見られるのであろうか。French(1988)は，仲間から拒否される子どもの約50%が攻撃性やコントロール喪失といった，反社会的行動を顕著に示すということを明らかにしている。このことから，拒否されている子どもの半数は攻撃的な子どもで，その他は引っ込み思案など，様々な要因であると考えられる。

これまでの研究結果から，拒否される子どもは，仲間関係に不満を持っていると考えられる。仲間に人気のない子どもは，人気のある子どもと比較して仲間に好意的に受け入れられることが少ないこと (Putallaz & Gottman, 1981)，また，他者からのポジティブな働きかけが少なく，ネガティブな働きかけが多いことが示されている (Dodge, 1983)。さらに，Ladd(1983)によると，休み時間の運動場での観察で，拒否される子どもは，他者と関わる時間が短く，遊び相手も変わりやすい。加えて，拒否される子どもの多くは，始めは互いにうまく相互交渉を取っていたとしても，攻撃行動などが原因となって，徐々に相互交渉が少なくなり，孤立していくと考えられる。孤立している子どもも，他の子どもと同様，仲間関係が重要であることから(Taylor & Asher, 1989)，彼らは仲間から拒否されることでネガティブな情動を引き起こすと考えられる。

1980年代から，拒否される子どもの自己知覚や情動について様々な研究がなされてきた。仲間に拒否される子どもは，そうでない子どもと比較して自分を有能でないと知覚し(Hymel, 1983)，抑うつ傾向が高く(Vosk, Forehand, Parker, & Rickard, 1982)，孤独感が高いことが知られている (前田, 1998)。しかし，拒否された子どもで，極端に強く孤独感を抱く子どもはいるが，拒否された子どもたちの大多数がそうだというわけではない。この孤独感における差は，拒否される程度や持続性，及び拒否の方法(身体的攻撃，無視等の攻撃のタイプ)および，他の友人の存在などいくつかの要因が仮定される。今後，拒否される子どもの孤独感に関する諸要因をより詳細に検討する必要があろう。

引用文献

Berkowitz, L.(1963). *Aggression: A social learning analysis*. Englewood Cliffs,NJ: Prentice-Hall.

Boulton,M., & Smith,P.(1994). Bully/victim problems in middle school children. Stability, self-perceived competence, peer perceptions, and peer acceptance. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 315-319.

Boulton,M., & Underwood,K.(1992). Bully/victim problems among middle school children. *British Journal of Educational Psychology*, **62**, 73-87.

Cairns, R., Cairns, B., Neckerman, H., Gest, S., & Gariepy, J.(1988). Social network and aggressive behavior: Peer support or peer rejection? *Developmental Psychology*, **24**, 814-823.

Coie., J.D., Dodge, K.A., & Coppotelli, H.(1982). Dimensions and types of social status: A cross age perspective. *Developmental Psychology*, **18**, 557-571.

Crick, N.R., & Grotpeter, J.K.(1995). Relational Aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*,**66**,710-722.

Crick, N.R, & Grotpeter, J.K.(1996). Children's treatment by peers: Victims of relational and overt aggression. *Development and Psychopathology*, **8**, 367-380.

Dodge,K.A.(1983). Behavior antecedents of peer social status. *Child Development*, **54**, 1386-1399.

Dodge, K.A., & Coie. J.D.(1987). Social information-Processing factors in reactive proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1146-1158.

Farver, J.M. (1996). Aggressive behavior in preschooler's social networks: Do birds of a feather flock together? *Early Childhood Research Quartely*, **11**, 333-350.

French,D.C.(1988). Heterogeneity of peer rejected boys: Aggressive and non-aggressive subtypes. *Child Development*, **59**, 976-985.

Gouldner, A. W.(1960). The norm of reciprocity: a preliminary statement. *American Sociological Review*, **25**, 161-178.

Harre, R., & Secord, P. F.(1973). *The explanation of social behavior.* Tatowa, NJ : Littlefield, Adams.

Hymel,S.(1983). *Social isolation and rejection in children: The child' perspective.* Paper Presented at the biennial meeting of the Society for Research in child Development. Detroit.

Kupersmidt, J.B. , & Patterson, C.J.(1991). Childhood peer rejection, aggression, withdrawal, and perceived competence as predictors of self-reported behavior problems in preadolescence. *Journal of abnormal Child Psychology*, **19**, 427-449.

Ladd,G.W.(1983). Social networks of popular, average, and rejected children in school settings. *Merrill-Palmer Quarterly*, **29**, 283-308.

Lesser, G.S. (1959). The relationship between various forms of aggression and popularity among lower-class children. *Journal of Educational Psychology*, **50**, 20-25.

前田　健一(1998). 子どもの孤独感と行動特徴の変化に関する縦断的研究—ソシオメトリック維持群と地位変動群の比較—　*教育心理学研究*, **46**, 377-386.

Mcneilly-Choque, M.K., Hart, C., Nelson, L., & Olsen. (1996). Overt and relational aggression on the playground: Correspondence among different informants. *Journal of Research in Childhood Education*, **11**, 47-67.

森野美穂(2000). 幼児の攻撃行動Ⅲ-攻撃行動のタイプとクリークおよび地位-　*日本教育心理学会第42回総会発表論文集*, 68.

Newcomb, A.F., Bukowski, W.M. & Pattee, L. (1993). Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, **113**, 99-128.

Olweus, D. (1977) . Aggression and peer acceptance in adolescent boys: Two short-term longitudinal studies of ratings. *Child Development*, **48**, 1301-1313.

Olweus, D. (1978). *Aggression in the schools: Bullies and whipping boys.* Washington, DC: Hemisphere.

Olweus, D.(1993). *Bullying at school: What we know and what we can do.* Oxford, England: Blackwell.

大渕　憲一(1993). *人を傷つける心　—攻撃性の社会心理学—*　サイエンス社

Parke, R.D., & Slaby, R.G.(1983). *The development of aggression.* In P.H.Mussen (Series Ed.) & M.Hetherington (Vol.Ed.) Handbook of child psychology(4th ed.,Vol.4,pp.547-642).

Parker, J.G., & Asher,S.R.(1987). Peer acceptance and later personal adjustment: Are low-accepted children "at risk"? *Psychological Bulletin*, **102**, 357-389.

Perry, D.G., Kusel, S.J., & Perry, L.C.(1988). Victims of peer aggression. *Developmental Psychology*, **24**, 6, 807-

814.

Price, J.M., & Dodge, K.A.(1989). Reactive and Proactive aggression in childhood: Relations to peer status and social context dimentions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **17**, 4 55-471.

Putallaz,M., & Gottman,J.M.(1981). An interactional model of children's entry into peer groups. *Child Development,* **52**, 986-994.

佐藤容子・佐藤正二・高山巌(1993). 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練 ーコーチング法の使用と訓練の般化性ー *行動療法研究,* **19**, 13-27.

Taylor,A.R., & Asher,S.R.(1989). *Children's goals in game playing situations.* Unpublished manuscript, University of maryland, College park.

Turner, R. H., & Killian,L.M.(1972). *Collective Behavior.* 2nd edn. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Vosk,B., Forehand,R., Parker,J.B., & Rickard,K.(1982). A Multimethod comparison of popular and un popular children. *Developmental Psychology*, **18,** 571-575.

Wasik, B.H. (1987). Sociometric measures and peer descriptions of kindergarten children: A study of reliability and validity. *Journal of Clinical Child Psychology*, **16**, 218-224.

Wright,J.C.,Giammarino,M., & Parad,H.W.(1986). Social status in small groups: Individual groups similarity and the social "misfit". *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 523-536.